

「臨床薬理学」

日本臨床薬理学会 編

京都大学総長

井村裕夫

薬物療法は治療医学の中でも最も重要な位置を占めるものである。medicine という言葉に、医学と同時に薬という意味があるのも、両者の極めて密接な関係の歴史を物語っている。もちろん現段階では、手術や放射線療法などの治療を要する疾患も数多いが、切らずに癒やす薬物療法は、治療医学の究極の目標と言ってもよいであろう。

しかし、薬物療法も決して容易なものではない。新しい薬の開発には、化学的研究、動物実験、そして臨床的な有効性と安全性の検討(治験)まで、長い時間、多大な労力と費用を必要とする。特に薬物の体内における動態と作用機構、他の薬物との相互作用、副作用とその発現機序の解明などは、決して容易に達成できるものではない。“薬を生み出すのは化学者であるが、歩き方を教えるのは臨床医である”という言葉がある。現在では歩き方を教えるには臨床医のみでなく、臨床薬理学者の果たすべき役割が大変大きくなっている。

薬の使い方を研究する科学者が必要
となってきたのである。

臨床薬理学は今世紀後半に生まれた新しい学問である。しかし最近20年ほどの発展は目覚ましく、わが国でも臨床薬理学会が発足し、多くの研究成果が挙げられている。また臨床薬理学者も、まだ量的には不十分ではあるが、少しずつ増加している。しかし臨床薬理学の知識は、必ずしも一般の医師に十分には理解されていない。そこからソリブジン薬害のような事件が起こるのである。

今回、医学書院から出版された「臨床薬理学」は、日本臨床薬理学会がその総力を挙げて編集されたものであり、臨床薬理学の主要な分野はすべて網羅されている。おそらくわが国では初めての、本格的な臨床薬理学の教科書であろう。

本書の出版は大変時宜を得たものである。その理由はわが国における治験のあり方について、多くの不信と批判が生まれ、そのあり方が再検

討されている時期だからである。更に「医薬品の臨床試験の実施に関する基準(GCP)」を国際化するための会議で合意が得られ、わが国でもGCPの改正がなされようとしている時期でもあるからである。

しかし本書の刊行には、それ以上の、少し大げさに言えば歴史的な意義があるように思われる。それは、かつては医師の匙加減に委ねられていた薬の使い方が、明らかに科学の対象となったことを告げるものであるからである。臨床医の1人として、筆者は医師の経験(匙加減)を決して軽視するものではないが、科学の裏付けがあってこそ、初めて信頼に足るものとなるであろう。薬を扱う医師は、その意味ですべて臨床薬理学の基礎知識を身につけねばならない。そうした目的には、本書は恰好の指針となるであろう。

●B5 頁524 図197 表161 1996
定価(本体9,200円+税) 7400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)